

ONE LOVE

通信

68号

2020年6月30日発行

ワンラブランドを愛してくれた人たち、ごめんなさい。20年以上をかけて築き上げたものがなくなりました。去年の年末再び洪水に遭い、復旧を目指して修理をしていました。でもその後、もっと大きな問題が降りかかってきました。世界中が新型コロナウイルスへの対応で右往左往していて、問題を抱えているのは自分たちだけではありません。だけど現状報告をさせてください。ここで約束をします。このまま倒れっ放しではないこと。いつものように、できることをやる。どうぞ私たちに力をください。



【あのワンラブランドは、もうない…。】

今年の2月1日を私は忘れない。この日、ワンラブランドがなくなった。話せば長くなることだが、今まで支えてくれた人たちにこの事実を伝えない限り、前に進むことができないので、今号でしっかり書きたいと思う。

ワンラブランドと呼ばれるその場所。私たちがずっと義足を作っていた場所だ。あれは96年だった。私はワンラブをスタートさせるために、日本で資金集めや中古の義足集めをしていた。ガテラはルワンダでワンラブをNGOとして登録したり、活動をする場所を探していた。虐殺後まだ混乱していた時期だ。地域の人と相談して、小さなバーだったところを借り受けた。そこを改築して、義肢製作所としてスタートさせようとする傍ら、その場所は足に障害を持つ人たちが、非常に来にくい場所だったので（舗装されていない急な坂道）、政府にもっと来やすい場所を提供してくれとお願いしていた。

ガテラは1年かけて、ワンラブランドを手に入れた。交渉をしていた役所には、エレベーターなどなく、足の悪いガテラは1年間ほぼ毎日、5階にあるそのオフィスに通って交渉を続けていた。

そこはただの荒野だった。いや荒野というのは当てはまらないかもしれない。1.5ヘクタールほどもあるその土地は、草がぼうぼうに生えていたが、近所の人々が勝手に農作物を育てていた。その農作物を買い取ることから始め、資金不足の私たちはレンガを1個1個手作りし、それで建物を建てた。ガテラは小さな苗木を買ってきて植え、それは何年かたって立派な木に育った。

しかし2000年を過ぎた頃、噂が流れた。ルワンダに鉄道が走る。ワンラブランドのところに線路を渡すらしいと。その頃からその一帯の住民は立ち退かされるのではないかと思うようになった。

そして05年に政府はその地域を湿地帯と定義づけた。確かにその頃から気候変動のせいか、雨が降ることが多くなった。しかし住民に対して、立ち退きを公の文書で伝えることはなかった。

12年ワンラブランドは初めて洪水の被害を受けた。敷地の中を流れる川が氾濫し、すぐ横の義肢製作所は大きな被害を受けた。機械・材料・パソコンなど、使い物にならなくなった。そしてそれまでに対応した患者さんたちのテ

ータを失った。幸いワンラブランドには他の建物もあったので、義肢製作所を移動させたが、その後洪水の被害は続いた。

そして去年の12月25日の夜。その日はクリスマス、そしてガテラの誕生日なので、二人で場末のバーに行き、祝った。町にはクリスマスのイルミネーションが輝いていたので、それを見に行った。そうしているうちに雨が降り出した。瞬く間に大雨となり、道に水が溢れ、川のようになった。何度も洪水に襲われた私たちは、この降り方はまずいと思い、慌ててワンラブに戻った。ワンラブのレストランはまだ開いていたが、危険を察知したガテラはすぐにスタッフに店を閉めろと伝えた。そして車の中に彼らを避難させたその時、ワンラブランドを囲っていた塀が崩れ、一気に濁流が流れ込んだ。あれよあれよという間に、あの広いワンラブランドに水が溢れ、腰の高さまでの濁流が朝まで延々と流れ続けた。

壊滅状態になったワンラブランド。私たちは一番高い位置に建てた建物を避難して無事だったが、全ての施設は滅茶苦茶になっていた。特に被害が大きかったのは、活動の資金源ともなっているレストランとゲストハウス。もうこれで5度目の被害だ（これを書くために、過去を振り返っただけ、今まで私はこれが4度目だと思っていた）。ここを直さないと、大事な収入源を失う。途方に暮れる間もない。直すしかないのだ。

そうしてお正月返上で修理工事をしていた。雨はクリスマス後も続き、ずぶ濡れになりながら、みんな作業をしてくれた。

1月29日、キガリ市主催で会議が開かれた。この地域の住民を集めて、今後の立ち退きのことを話し合った。現状そこでビジネスをしている人や住民には立ち退きに対しての補償はないと伝えられた。当然みんな怒る。声を荒げる。そんな中、学校・教会・私たちのような支援活動をしている人たちは別枠で話し合うと言われた。つまりそれらには何らかの補償があるだろうと思われた。

1月31日の夕方、市長・警察などがワンラブを訪れた。そして言った。

「天気予報ではこの2～3日中に、過去にない大雨が降ると予報されている。この場所は洪水の被害を受ける可能性が高い。だから今すぐ出ろ。」

顔を見合わせるガテラと私。そんなの無理だ。ここには

あらゆるものがある。義足を作るための機械・材料。レストランやゲストハウスのためのテーブルや椅子。何しろ20年分のものがここにある。だから言った。「この間の会議の話と違う。別途時間を取ると言ったのに、今すぐ出て行けなど、当然できるはずがない。」

そんな押し問答があり、お互い引かない。市側はとにかく代替地があるから、そこを見に行こうと。連れていかれたのは、市街からほど遠い山の上。そこは5年前に建てられたビルで、今の今まで誰も使わなかったビル。そこからの見晴らしは素晴らしい。「どうだ、真新しい建物だ。ここから見る景色も絶景だろ？」だけどそんな所に移動したら、どうやって足の悪い障害者が来れるというのだ？バスをいくつか乗り換えて来れるほど、彼らは豊かではない。だからここを提供されても、引っ越しは無理だと伝えた。その後もう一か所連れて行かれたが、あたりはすっかり暗くなっており、建物や回りの状況を見ることもできなくなっていたので、私たちは車から降りることすら拒んだ。彼らは明日また来ると一言残して去っていった。

そして翌日。彼らは大きなショベルカーをもってやってきた。ああ、この人たちは本気だ。自分を守るために、武力行使をしようとしている。ここで万一洪水が再び起こり、住民が命を失ったら、彼らの責任を問われるからだ（実際洪水で既に何人か命を落としていた）。それでもこっちは訴える。待て、ここを出ないと言っているわけではない。だけどこの場所は自分たちで建てた建物だ。多くの人の支援を受け、それで建てたものだ。補償もなく、ここを出るわけにはいかない。私たちは何も悪いことはしていない。ここでずっと義足を作り続けただけだ。今すぐ出ろと言われても、何も準備ができていない。だから時間をくれ。

だけど何を言っても無駄なのだ。彼らは上からの命令で、これをやらない限り、自分たちの首が飛ぶかもしれないのだ。

せめて中の機械や荷物、義足の材料を取り出させてくれと頼み込み、それだけは聞いてくれた。

だがその後、ショベルカーによって、長年使いこんできた義肢製作所はあっという間に壊された。



壊されていく義肢製作所。この光景は一生忘れることができない。そして二度とこんな思いをしたくない。これからはショベルカーを見るたびに、この日のことを思い出すに違いない。

記録を残さなくてはと、写真を撮り、ビデオを回す。そんな私を脅す彼ら。これ以上写真を撮ると、お前をブタ箱に入れるぞ。この銃が目に入らないのか？

やれるものならやってみろ。ここで私を殺したら、それこそルワンダの悪い評判が世界に伝わるだけだ。

壊されていく建物を見ながら、悲しみは出てこなかった。悔しさも、その時はあまり感じられなかった。それよりも

今日自分たちはどこで雨風をしのぐのか。荷物をどこに運び込むのか？そのために何が必要なのか？何人人を雇って、何台トラックを借りて、そのための費用をどこからどうするのか？一瞬にして、次にやらなければならないことが、頭の中に浮かんでくる。

どうかこれを読む皆さん、ガテラのことを責めないでください。ショベルカーが建物を壊している間、ガテラは出てこなかった。出てこれなかったというのが正しい。今まで自分がルワンダの障害者のために、寝る間も惜しんで動き続け、いろんな人から支援をもらい、虐殺後のルワンダの復興に力を注いだものが、同胞によってこんなふうに壊されていく様子を見ることができなかったのだ。私の無念さなんて、ガテラの痛みに比べれば、ずっと弱い。

ワンラブランドの回りには、人だかりができていた。ワンラブは、みんなから愛されていたと思う。土地も広く目立つし、長いことやっていたから、たくさんの人がその場所を知っていた。そこが壊されているというニュースは、きっとすぐにあちこちに伝わったのだろう。みんながショベルカーが無慈悲に壊していく様子を淡々と見ていた。ワンラブのスタッフも、何もできず、ただ立ち、私を見ると力なく笑った。その日は、壊されなかった建物（洪水になった時に、引っ越した建物）で寝た。

頭の中が興奮していて、ろくに眠れず、次の日を迎えた。さあ、立ち上がらなくては。ガテラと共に起きだし、壊された所に向かった。何も言わずそれを見ているガテラ。ショベルカーは今日もやる気満々で、その場所に放置されている。とにかく政府のショベルカーで壊されることだけは阻止しなくちゃいけない。なぜならば壊すためのショベルカー借り上げ費用、壊す費用を請求される可能性があるからだ。意気揚々とやってくる役人たち。彼らとの交渉が始まる。自分たちの手で壊すから、あのショベルカーを引き上げてくれと。

自分たちの手で壊すとは、言葉通り人力で壊すということだ。この広いワンラブランドにあるすべての建物を自分たちで壊す。それは余分な費用を請求されないための防止策であり、建物に対する供養の気持ちでもあった。

交渉をする相手の中に、とても嫌な顔をした役人がいた。役人という権利を振りかざす男だ。昨日私を脅したのもこの男だ。何しろ強行突破したいらしい。だから言ってやった。明日は我が身だぞ、と。

何とか自分たちで壊すことに同意をしてもらい、動く。人の手配、トラックの手配、そしてスクラップを買い取る人たち。それらを一気に集める。建物一棟を壊していくら、壊した建物から出てくる鉄筋・鉄くず1キロいくら、そんな交渉が始まる。建物から取り出した便器やシャワー設備などでもできるだけ高い値段で買ってくれる人を探す。

あの頃、自分たちで1個1個作ったレンガは、売らずにとっておこう。次の義肢製作所を建てるための財産となるはずだ。

一体何人の人が壊すために、買い取るために、動いていたのだろう。あらゆる人が行き交い、数えるゆとりもなか

った。ただ動く。鉄くずを売ったお金を数え、働いてくれた人に払う。スクラップが何キロあるか、一緒にトラックに乗り込み、重量を測る。1 キロも無駄にしない、あるいは嵩減らしをされないために、自分の目で確かめなくてはいいけない。

政府はとりあえず荷物を運びこむための代替地は用意してくれた。あの山の上にある真新しいビルだ。そこに荷物を運びこみながら、自分たちもひとまずそこに引っ越す。だがそこは今まで一度も人に使われていないにもかかわらず、既に建物は老朽化し、カビて、壁が崩れ落ちている。そして水も出ない。

来る日も来る日も、建物を壊しては、使えるものと捨てるものに分け、荷物を運び、お金を数える。その繰り返しだ。夜に代替地に戻ってきても、シャワーが出るわけではない。ポリタンクに水を汲み、それで適当に顔を洗い、面倒なのでシャワーも浴びない。

だんだんと壊されていく建物。私たちの思いがたくさん詰まっているその場所。自分たちだけで作り上げた場所ではない。ここにはいろんな人の心が入っていたはずだ。それがなくなりつつある。ガテラが植えた木は、相変わらず立派に育っていて、そこから漏れる太陽が心に突き刺さった。だけどまだ絞り出されるような苦しさが出てこない。

辛くなっていったのは、そこにいた猫が一匹、また一匹と死んでいった時だ。ショベルカーで壊される。猫は当然何が起こったのかわからない。自分たちがいた場所がなくなり、たくさんの人が行き交いながら、さらに壊されていく。毎日ご飯をあげるものの、あれ？あの子がいないと気付く。探すと、がれきの片隅で泥だらけになって死んでいたり、道路で車に轢かれて死んだりした。そして最後の

匹。私の姿を見ると、足を怪我したのか、ぴっこを引いて、力なく鳴く。だんだんと弱ってきている。何とか捕まえようとしても、逃げてしまう。ごめんよ、ごめんよ。ここに生まれなければ、こんな目に遭わなかったのに。その猫の顔が「どうしてこんなことになってしまったの？」と私に問いかけているようで、自分の不甲斐なさを責めた。

そしてついに死んだ。その時初めて私は泣いた。建物を壊されてから、我慢していたものが一気に溢れ、泣いた。罪を犯したと思った。泣きながら、泣いている暇はないと思いつながら。

人はつらいことがあると、希望を見つけたくなる。何とかして生きる意味を見つけようとする。そんな時に力をくれたのも猫だった。

がれきの中から声がする。子猫の声だ。泥まみれになった子猫だ。どの猫の子供だったのだろうか。お母さんとお父さんは死んじゃったよ。だけどこの子は生きている。生きようと、大きな声で鳴いていた。この子は死なせない。生きなくちゃダメなんだ。

そしてまたしばらくして、ショベルカーは再び戻ってきて、今度は流れている川の護岸工事を始めた。大きな力で、あっという間に川幅を広げていく。私たちが何年もかかってできなかったことを、一瞬で成し遂げてしまう。その工事をしている手前の川の中。何人もの子供たちが、がれきを拾っている。壊された建物のレンガであり、鉄くずのような他愛もないものだ。泥水のような色の川の中で、それらを拾っている。彼らはそれを拾って、お金に換えて、今日の生活の足しにするのだ。子供同士連携して、拾う子、洗う子、分ける子、手際よく作業を進めている。果たしていくらになるのか？どうせ大した金額にはならないだろう。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【俺たちは負けない。】

子供の頃からいろいろなものを見て、感じてきた。例えば大虐殺。俺の人生の半分以上はその歴史の中にある。そして俺は障害と共に生きてきた。周りにいる友人。彼らと一緒に育った施設。

その施設ではとてもかわいがってもらった。そこにいた神父さんにお礼を言おうとしたら、自分に対して礼を言う必要はないと言われた。その代り、その気持ちを他の人に向けなさいと教えられた。

だから俺はその言葉を守ろうと、ワンラブを始めた。

だけどその場所が壊された。20 年以上かけて築きあげたものがなくなった。その様子を俺は見るができなかった。

翌日それを見に行き、俺のやるべきことは決まった。それはここを再建するというのだ。俺たちができることは、ここを元通りにして、また義足を作ることだ。

俺はもう若くない。時間は限られている。だから立ち止まっている暇はないのだ。

ワンラブを支援してくれていたみんな、こんな結果になって申し訳ない。だけど見ていてくれ。

必ずその日はやってくる。理不尽な壊され方はしたが、政府だって理由があってやったこと。事実、あれからも大雨が降り、ワンラブブランドを流れる川の下流は、何度も氾濫し、子供の命も奪われそうになった。

生きていれば、いろいろなことが起こる。なあに、大虐殺を生き延びた俺だ。そう簡単には死なない。ここで生きていると、否が応でも鍛えられる。そして人間は問題があるから、学べる。それは俺がいつも言ってるだろ？ルワンダの大虐殺からも学べるのがたくさんあるって。

人は痛みを知って初めて相手の気持ちを理解できるようになる。その痛みを身近なものと感じることができる。

だから俺は降りかかってきた災難は、決して無駄にはならないと信じている。いや、信じなければ、この世の中やっていけないのかもしれない。

まあ、正直ゆっくりもしたいけれど、もうひと踏ん張りするさ。そして俺にだって意地がある。壊されてこのまま泣き寝入りはしたくない。そして死ぬときに後悔はしたくない。

それにしてもここが完成した日には、たくさんの人に一緒に祝ってほしい。日本からもたくさんの人が来て、盃を交わしたい。その時はルワンダ名物のヤギの串焼きを用意するか。だから皆さんは日本の酒を持ってきてください。そしてみんなで酔っぱらおう。朝まで。約束だぞ。

それを見て、思った。ああ、私は彼らのように生きていこう。後ろにあるショベルカーのように、大きな力を振りかざすのではなくて、ほんの小さなものから力をもらって、したたかに生きて行こうと。そのショベルカーと子供の対比は、すんと私の心の中に入ってきて、自分がどうやってこの先生生きていきたいのかがわかった。

仮の宿の代替地に夜戻るたびに、気持ちがふさぐ。ここにはいるべきではない。どんなに見晴らしがよく、ルワンダの景色を楽しめたとしても、ここに私たちの幸せはない。



がれきを拾う子供たち。
後ろにはショベルカー。
この光景を見た時に、決心はついた。

だから家を借りた。この20年間、ルワンダで家賃など払って来なかったのも、もったいない気もしたが、人にあてがわれた所に居続けるより、自由になろう。まずは自分たちの生活の基盤だ。筆筒や洋服、テーブルなど生活に必要なものを運び込み、ガテラと新婚生活のやり直しだ。家猫として飼っていた猫、そして泥だらけだった猫も、そこで新しい生活のスタートだ。

そして新しい義肢製作所の建設だ！ガテラは親戚から譲られた土地がある。そこに新しい義肢製作所を建てるのだ。ワンラブランドに比べりゃ、全然狭い土地だけど、正真正銘自分たちの土地だ。誰にも何も言わせない。

基礎を掘り、鉄筋を組み、また作り直しだ。あの頃、レンガを作って建物を建てたように、今度はブロックを作り始めた。基礎となる石は、ワンラブランドの基礎を作る時に使っていた石を掘り返し、それを運び込んだ。相変わらず節約だらけの建設だけど、それでいい。正直言って、この年になって、また一からやり直すとは思ってなかった。ワンラブランドの立ち退きの話はあったので、いつかは立ち退くだろうとは思っていたけど、政府から補償があっての話だと思っていた。だけどそんなものは一銭ももらえなかった。だったら自分たちでやるしかない。

それがいつ出来上がるかはわからない。1年後なのか、3年後なのか、あるいは10年後。もしかしたら私の方が先に死んでしまうかもしれない。でもやり続ければ、きっといつか出来上がる。私たちが作り上げることができなったら、誰かが後を引き受けてくれるだろう。

今は借りた一軒家の片隅にあった物置となっていたところを改築して、義肢製作所として使っている。ただ、これはまだ私は見ていない。なぜならば、私は日本に来てしまったから。早くその姿を見たい。

今回帰国の時期を3月からとした。例年は年末から年始にかけてだったが、4月に長野で行われる車いすマラソンにガテラが出るはずだったのだ。だけど洪水の被害に遭い、とてもじゃないけどルワンダを留守にできないと、ガテラはルワンダに残ることにした。そして私はルワンダの小学

生と先生を日本に連れてくる予定があったので、どうしても日本に戻らなくてはならなかった。そんな時に政府から強制退去をさせられたということになる。

だから今回ガテラはルワンダ、私は日本。失われていくワンラブランドを見ながら、ガテラは何を思ったのか。そして新しい義肢製作所を作りながら、ガテラはどんな未来を想像しているのか。一人そこで奮闘しているガテラの心の中は、まだ見えてこない。

結局日本にルワンダの小学生を連れてくることも、新型コロナウイルスのため実行不可能となり、帰国した私も予定していたことがほぼキャンセルになり、相変わらず思ったように事は進まないと感じた半年だった。



そしてまた始まった建設工事。
たくさんの人に手伝ってもらいながら、ジワジワ進めていきます。

今ワンラブを支援してくれる人に見える約束は、とにかく新しい義肢製作所を作るということ。そして細々ではあるが、いつものように義足を作り続けること。

今回住む場所を追われ、もしかもしれないけれど難民の気持ちを感じることができたし、震災などで家を失った人たちの思いが知ることができた。そしてそれはこれからのワンラブを進めるにあたって、決して無駄にはならない経験だったと思う。

新しい義肢製作所が出来上がったら、その時はビールを飲ませてください。きっとその時に飲むビールは、五臓六腑に染みわたる。

いつも言っていることだけど、ワンラブは不滅です。どうぞこれからもワンラブを見守っててください。よろしくお願いします。

【そしたらコロナウイルスに阻まれた。】

ガテラを残し、ルワンダから日本に戻った。先に書いたように、ルワンダの小学生と先生を連れてくる予定だった。長年交流を続けている長野の小学校が、二人を招いてくれたのだ。ワンラブランドの処理をしながら、航空券の手配をし、日本行きのビザを取り、それは落ち込んだ気持ちの中であっても楽しかった。

だがだんだんと心配になってきたコロナウイルス。クルーズ船のことがルワンダでもニュースになり、日本は危ないのではと皆が思い始めた時、先生から連絡があった。こんな状況では、人の子供を連れて日本に行けない。万一のことがあった時、責任を取り切れない、と。

確かに一理ある。でも私はまだこの時は高をくくっていた。コロナウイルスと言ったって、インフルエンザの亜種だろうと。だから一緒に行こうと説得したのだが、先生は引かない。結局私が折れた。無理に連れて行くことはできない。その旨を長野の小学校に伝えたところ、その数日後

に日本の全国の学校が一斉休校となった。つまり行ったところで、迎え受けてくれる学校はもうない。

仕方ない。私だけでも日本に行こう。とにかく3か月分の予定を入れてしまったのだから、新しい義肢製作所を作るための資金を集めに行かなくてはいけないのだ。

そう思って日本の地を踏んだわけだが、徐々に出てくるキャンセル。あれよあれよという間に、3月の予定がほぼなくなった。それでもシタバタして、何とか入れていた予定を遂行できないかともがいていたが、予定の多くは学校関係だったため、どうすることもできなかった。

4月、5月の予定もキャンセルとなり、何のために日本に戻ってきたのかわからなくなった。行く先々で売ろうと思っていたアフリカグッズや、帰国のために作ったワンラブゴリラTシャツをネットで販売して、資金の足しにした。

自分の時間がたっぷりできたので、いろんなことを考えた。どうしても気になるのが、ルワンダにおいてきたガテラの存在。ルワンダもコロナウイルスのため外出の制限がされたので、自由に動けない。ご飯はきちんと食べているのだろうか？

そしてそんな時に長いこと病を患っていたガテラのお母さんが亡くなった。コロナウイルスのため、人が集まることを禁止されているので、お葬式にはごくわずかな人しか来なかった。友だちがたくさんいたお母さんだったので、寂しい最期を迎えさせてしまったことが辛い。

そしてまたルワンダから電話。長いこうちで働いていたセキュリティが、交通事故に遭って、足を切断したと…。義足を作っている私たちの元で働いていた人に義足を作らなくてはいけない辛さ。

どうして後から後から、悲しいことが出てくるのか。何か悪いことをしたのか？どうしても自分の行いが悪いのではないかと思ってしまう日々だった。

【それでも良いことはある。】

そんな落ち込むことの多い滞在ではあったが、一つ良いことがあった。

30年間憧れていた作家の椎名誠さんと対談ができたことだ。20代になったころ椎名さんの本と出会い、ストレートな物言いと、それでいてきっと優しいだろうと思わせる人柄にずっと惹かれていた。

事の始まり。東京都人権啓発センターの人と出会い、イベントをやろうということになった。ゲストを迎えて。ゲストを誰にするかと聞かれた時、悩んだ。大きい会場を借りるので、知名度のある人じゃないと人が集まらない。でも有名な人の知り合いなどいない。叶うはずがないと思いながら、なかば冗談のつもりで椎名誠さんの名前を挙げた。そしたらうれしいことに、それが通ったのだ。

それからの私は天にも昇る気持ち。その日をひたすら夢見ていた。だけどコロナウイルスが迫ってきて、予定の3月には開催不可能となった。さらにだんだんと感染は広がり、人を集めてやるなど無理な状態となった。

それでも担当者は諦めずに考えてくれ、最終的に5月末

にYouTubeを使ってオンライン配信することとなった。前半は私一人でワンラブの話、後半に椎名さんとの対談。

当日とても緊張した。30年の憧れと言うと、その頃の私はまだ若い。あの頃の胸のときめきを、50過ぎて感じられることに感謝した。かなり早めに会場に着いたけど、気はそぞろ。人の話が頭に入っていない。

一番大きかった不安は前半のワンラブの話の部分。話が時間通りに終わられるかということ。私はいつも話し過ぎて、時間が押してしまうのです。時間が押すということは、つまりその後の椎名さんとの対談時間を減らされるということにもなる。さらに生で配信なので、とんでもない発言をしてしまったらどうしようという不安。実はこれは過去NHK テレビに生で出してもらった時に失敗して、トラウマになっている。とんでもない失敗をして、担当者の首が飛んだらどうしようと、そのことを伝えたら、その担当者は「こんな首ならいつでも捧げますよ。」と言ってくれた。手の平で首をチョンチョン切るジェスチャーを加えながら。それを見て、気持ちが落ち着いた。そして安心させてくれる言葉を言える、その人の懐の大きさを感じた。

実際に会った椎名さんは、私の期待を裏切らず、ジーンズと履きこなしたブーツでやってきた。しっかりと日に焼けていたけど、その焼け方が面白かった。目の回りは白いのだ。太陽の下、サングラスをかけながら過ごしているんだろうなと思った。

対談中うれしかったのは、椎名さんが私のことを根性があると言ってくれたことだ。しんどいことが重なり、気落ちする中、ぼそっと言ってくれたその言葉は、これからルワンダに戻る私への蹴っ飛ばしに感じ、改めて今回お会いできたことに感謝をしたい。



あっという間に終わっちゃった…。もっといろいろなことを話したかったな。だけどすごく良い思い出になりました。

椎名さんの本を読むようになって30年以上。読みながらいつもこんな男性は素敵だなと思っていた。20代の頃は椎名さんの講演会を聞きに行ったりして、終わってから会場を出るのをこっそり待って、サインをしてもらったこともある。そして今回は椎名さんがアフリカに行った時のことを書いた本にサインをしてもらった。何だかヘタウマのキリンの絵も一緒に。

そんな企画を、この時期に実行してくれた皆さま、本当にありがとうございました。そして配信を見てくれた人、ありがとう。壁はいくつもあったのに、一つ一つ打ち破って成し遂げた今回の企画は、私の元気の元となりました。

家に戻ってからも興奮が冷めず、若い頃にタイムスリップしたようで、そのウブな気持ちをこれからも持ち続けたいと思った次第です。



雑文もろもろ

今号の記事は、ワンラブの現状を伝えたいがために、それが長くなってしまいごめんなさい。漫画も載せることができませんでした。自分の気持ちを奮い立たせるためにも、起こったことを文章にしないと区切れないと思ったのです。

新型コロナウイルスが迫る中、ガテラはルワンダで奮闘しています。その気持ちを考えると、胸がとても痛いです。だからこの通信がお手元に届くころ、ルワンダの飛行機が飛びようになっていれば、私はルワンダに戻ります。

今回の件は、私以上にガテラが辛い思いをしているでしょう。なぜならば同じルワンダの人にやられてしまったことだからです。でもガテラは恨み言を一切言いません。

そして二人とも、まだ今回のことを振り返ることができません。やることがたくさんあるから、それを話している暇がないということもあります。でもそれ以上に、このことを振り返るほど、自分たちの気持ちが整理できていないということがあります。そしてそれを口にする、我慢していたものが溢れてしまいそうだからです。話してしまうのが怖いのです。だからもう少し二人で強がって、黙って仕事をします。

ルワンダを出て4カ月。戻った時には、ワンラブランドはすっかりなくなっていることでしょう。その景色を見た時、私は何を感じるのか。それも怖いです。どのくらいの喪失感なのか。今はわかりません。

だけどその喪失感を自分が受けることによって、例えば足を失った人がどんな喪失感を持つのか、それを知ることができるのかもかもしれません。

問題をそのまま受けとめて、その上で何をすべきか、何をしたいのか。そのチャンスをもらったと思います。

今の私たちがしたいことは一つ。新しい義肢製作所を建て、そこでまたいつも通り義足を作ること。そして言うならば、それが私たちを追い出した政府に対して、ざまみろと伝えられる方法なのではないかと思うのです。

どうぞ皆さま、その日を待っていてください。そして最後に申し訳ございませんが、義肢製作所が完成するように資金の援助をお願いします。セメント一袋 1600 円。何袋分でもありがたいので、ご協力をお願いします。

【ご寄付をありがとうございました。】

いつもならここでいただいたご寄付の金額と、作った義足などの数を書くのですが、今回集計している余裕がありませんでした。次号を出すときにまとめて書きたいと思いますのでお許しください。

【新しい支援の形。】

ワンラブへの新しい支援の形として、電気で社会貢献に繋げるハチドリ電力と協力を結ぶことにしました。

ハチドリ電力は地球に優しい二酸化炭素ゼロのエネルギーを供給しており、さらに消費者にも負担の少ない良心的な料金設定になっています。

ハチドリ電力は二酸化炭素ゼロ、原発ゼロの実質自然エネルギー100%の電気をお届けしているため、火力発電の電気と比べて排出される二酸化炭素が約半分になります。

つまりハチドリ電力を使うことによって、自然を守ることもできるのです。

ではどうやってワンラブに支援が行くかというところ…

皆さまのご自宅や会社の電力をハチドリ電力に切り替えていただくことで、自動的に毎月の電気代の1%がワンラブへと贈られます。たったそれだけ。

切り替えていただいたご家庭には、ハチドリ電力から毎月メールで活動報告が届きます。

電気の切り替えには解約手続きなどは必要なく、検針票に記載されている地点番号とお客番号の入力だけで、インターネットから簡単に切り替えできます。

またインターネットをお使いでない方は、お電話でのご相談も受け付けておりますので、お気軽にご質問ください。

電話番号：092-402-1115（ハチドリ電力）

メールアドレス：customer@hachidori-denryoku.jp

まずはハチドリ電力のHPをご覧ください。ご検討ください。

<https://hachidori-denryoku.jp>

ハチドリ電力のワンラブ応援ページはここ↓

<https://hachidori-denryoku.jp/list/onelove/>

私がいる茅ヶ崎の住まいは、自宅兼事務所となっていますが、今回の取り組みに際して、この場所もハチドリ電力に切り替えました。だから言ってみれば、私が日本に戻ってきた時に使う電気代の1%も、自動的にワンラブに寄付されるということになります。

私の小学生の時のあだ名は「どケチ」。なぜそのあだ名がついたのか、子供心にもよくわかりませんが、確かにやたらと節約していたのは確か。家の中で無駄な電気がついていっていると、消して回ったし、水の出しっ放しも、非常に気になりました。それは今でも同じで、ルワンダにいても、夜に無駄な電気を消しまくるので、ガテラから貧乏っぽいと言われることもしばしば…。ガテラの場合は、泥棒よけのためにも、電気はつけておきたいのですね。だけどつい消してしまうのだ。

どうぞ皆さま、これを機会に電気の切り替えをご検討ください。間違えないで。ワンラブへの支援ですよ。他の団体を選んじゃダメだよ。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、ボランティアも常時募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、未使用切手は下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 68号 2020年6月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project